

# 一葉の恋愛観と徒然草

——初期の作品を中心に——

## 一 はじめに

何ごとであれ、最初の一年というものが大切なのではないだろうか。

たとえば『源氏物語』初音巻から行幸巻に至る七帖は、初音・胡蝶・螢・常夏・篝火・野分・行幸と続き、それぞれの巻名がそのまま季節の推移をあらわしており、光源氏三六歳の正月から三七歳の二月までを描くが、これは六条院の最初の一年である。また、『和泉式部日記』は、和泉式部と敦道親王との出会いから親王の死没までの四年半の恋愛期間のうち、最初の約一年のみを描き、長保五（一〇〇三）年四月から翌年寛弘元年一月までの、初夏から新春に至る二人の心の交流の襞が四季

の移ろいとともに写し取られる。

それでは、樋口一葉にとつての「最初の一年」は、いつだったのだろうか。

\*1  
島内裕子

小説のことに従事し始めて一年にも近くなりぬ。いまだ世に出したるものもなく、我が心ゆくものもなし。親はらからなどの、「なれは決断の心うとく、跡のみかへり見ればぞ、かく月日ばかり重ぬるなれ。名人上手と呼べるゝ人も初作より世にもてはやさるゝべきにはあるまじ。非難せられてこそ、そのあたひも定まるなれ」など、くれぐれ責めらる。<sup>(1)</sup>

これは、「森のした艸」と題された、明治二四年一月起筆の感想断章群の最後に収められている一文である。この部分の正確な執筆時期は特定できないが、重要なのは、いつこれが書

かれたのかということよりもむしろ、一葉がある時ふと、小説執筆を志してから一年経ったことを意識した、ということであろう。一年経ったが、まだ作品として形を顕わし世間の陽の目を見たものがないことを、母や妹が非難する。その口振りは、おそらく偶然の一致ではあるうが、次に示す徒然草第一五〇段の傍線部を一言で簡潔にまとめたものと言ってもよいほど似ている。

能をつかんとする人、「よくせざらんほどは、なまじひに人に知られじ。うちうちよく習ひ得て、さし出でたらんこそ、いと心にくからめ」と常に言ふめれど、かく言ふ人、一芸も習ひ得ることなし。未だ堅固かたはなるより、上手の中に交りて、毀り笑はるゝにも恥ぢず、つれなく過ぎて嗜む人、天性、その骨なけれども、道になづまず、濫りにせずして、年を送れば、堪能の嗜まざるよりは、終に上手の位に至り、徳たけ、人に許されて、双なき名を得る事なり。天下のものの上手といへども、始めは不堪の聞こえもあり、無下の瑕瑾もありき。されども、その人、道の掟正しく、これを重くして放埒せざれば、世の博士にて、万人の師となる事、諸道変はるべからず。

しかし、このすぐ後で一葉は、母たちの非難にもかかわらず、自分自身の信じるところによって作品を生み出す決意を述べているが、一葉が小説を志した一年とは、そのまま半井桃水

との一年でもあった。一葉が最初の作品『闇桜』を発表したのは、桃水の雑誌『武蔵野』においてであり、この雑誌は桃水が一葉を世に送り出すために創刊したといってもよいほどのものであった。一葉は『武蔵野』が第三号で廃刊になるまで月号、恋愛をテーマとする短編小説を発表し、『闇桜』『たま櫻』『五月雨』の三編が生み出された。本稿では、桃水との出会いから、最初の作品群が発表されるまでの約一年を中心に、それ以前も含めていくつかの時期に区切り、作品創造のプロセスを一葉の恋愛観に焦点をあてながら、主として徒然草などの古典文学との関連から考えてゆきたい。<sup>(2)</sup>

## 二 兄の死と無常観

一葉は、妹くのに友人野々宮菊子の紹介によって、明治二十四年四月一五日に半井桃水への小説修行の弟子入りを果たした。しかし、初期の小説が生み出されるにあたっては、桃水の指導ということ以外に、当然それまでに一葉が身につけていたさまざまな読書体験による知識教養や、現実の体験が有形無形に反映していることであろう。したがって、まず桃水との出会い以前に一葉がどのような体験を経ていたか、文学的・現実的体験の両面から考えてみたい。「桃水以前」の一葉の現実体験の中で最も重要なのは「萩の舎」入門、および兄と父の死である

う。これら三つの出来事が結び付いた結果として書かれた未完の断章がいくつか残されており、それらは一葉の文学を考える上できわめて重要なものを含んでいると思われるので、最初にそれらを取り上げることにしよう。

一葉の父樋口則義は、明治二年七月一二日に病没した。その後、一葉と母と妹の三人は一時、次兄虎之助のもとに身を寄せたが、明治三年五月から九月までの半年近く、一葉だけが、「萩の舎」に内弟子となつて住み込んだ。この時期に書かれた断片数編は、一葉が初めて親元を離れて暮らすという、それまでにない環境の激変を体験したことによつてどのような精神的成長変化を遂げたかということが垣間見られる貴重な記録と言つてよい。「萩の舎」内弟子時代に一葉は、中島歌子の後継者となる夢の瓦解を味わたが、後の一葉文学の誕生の土壌となる内省的な思索態度と抒情的な描写力を身に付けたものこの時期であつたと、考えたい。そのことは、たとえば明治二三年秋ごろに書かれたと推測されている次のような断片によく表れている。

朝がほの露風の前のともし火、それよりも猶あやふき人の命、いつをいつといふ限はあらねど、老たるはさてもありなん、年若き身こそいと安からね。其人に寄て親はらかなの苦楽は生ずる物なるを、我兄泉の君、世を早くし給ひしより以来、袖の涙はく時なく、むねの思ひ絶るまなか

りし。其折々かひつくるも一は人しらぬ悲しみをもらし一は我身の経歴になん。思ひ出る明治二十年七月の頃なりけり。我兄ふと病にかゝりぬ。元より世の人よりは弱かりし人の病なれば、其事となくなやみて七月も過ぬ。八月も過ぬ。九月十七日といへるに例の如く余は師の許がり行ぬ。午後四時といへるに家に帰るに、兄は強くなやみて臥居れり。そもいかにと母にとふに、いはく、大病也、物へまかりたるに其所にて甚だしく血を吐したり、家に帰るに未だやまず、静に養生をなす、と聞ていといたく打驚きぬ。そも此日を病の初として、十月十一<sup>（一）</sup>を空しく過て十二月とも成ぬ。かひなくも二十七日といへるに、遠きやみ路が人には成ぬ。其折の事はかく事もあらず、涙のみ也。まして育てし父母の情しるべし。七日十日の程は悲しきとだに思ひ出ず、夢の様にて過ぬ。<sup>(3)</sup>

〔無題その三〕より

一葉の長兄泉太郎は、この断片にも書かれているように、明治二〇年一月二七日、二四歳の若さで病没した。その時の悲しみが、「萩の舎」内弟子時代の明治二三年秋になつてこのようなかたちで書き留められていることに注意する必要がある。この断片も正確な執筆時期は不明だが、「思ひ出る明治二十年七月の頃なりけり」という表現や冒頭の「朝がほ」という言葉などから推測しておそらく夏から秋にかけてのある時期に書かれたものであろう。一葉は「萩の舎」での内弟子の日々の中

で、ある時、このような現在の自分の境遇をもたらすそもそものきっかけとなったこととして、三年前の兄泉太郎の死を捉え直したのではないだろうか。

ここで特に注目したいのは、傍線を付した部分である。人間の命のはかなさ、老少不定の世の中の危うさが、兄の死という現実から実感として強く一葉の心に刻み込まれたのである。このような心情をもって徒然草を読む読者は、一葉ならずとも、徒然草のあちこちに描かれている無常観に共感せずにはいられないであろう。拙稿「樋口一葉と徒然草——初期の日記と習作を中心に——」において、わたしは、一葉が父の死前後あたりから、徒然草の思想的な面に深い理解と共感を示すようになってきていることを指摘した。<sup>(4)</sup> そのような一葉の精神的成長の流れの中で、父の死以前の長兄泉太郎の死も、この時期になつて強い感慨をともなつて再認識され、その結果として先に引用したような断片が書かれたと想像される。なお、一葉の初期の短編小説には、若い主人公がはかなく死んでゆく結末が多いが、それらの筋も単なる空想ではなく、身近な若い兄の死が、影を落としていると考えられる。

### 三 内弟子時代の雑記にみる一葉の文学性

前節で見た兄の死に対する断片も、執筆時期は「萩の舎」内

弟子時代とされているが、ここでは、より明確に内弟子の感慨が表されている断片を見てゆくことにしたい。

まず、「しのふくさ」と名付けられた雑記に書かれた断片を、番号を付して以下に示してみよう。

- ① この上、世を早くし、父君にも又おくれにたり。昨日は家の娘たりしものが、今日は他家の下（以下書かれず）
- ② 明治の二十三といへるとし、五月より師のもとへつかふべき身とは成ぬ。

#### ③ はつ秋風

秋はいつもかなしき物ながら、ことしはましてさまざまみだるゝ事しげくて、誠に風もみにしむとぞ覚ゆる。こぞ家尊の大人に別れまいらせてより、今師のもとに仕るべきみと成ぬるまでの心づくしよ。

#### ④ はつ秋風

秋はいつも悲しきものながら、今年はましてはぎのした露みだるゝ事しげくて、誠に風もみにしむとぞおぼゆる。こぞ家尊の大人に別れまいらせてより、今師のもとにつかふまつるべきみと成ぬるまでの心づくしよ、沖の石の人こそしらざらめど、袖ぬるゝこといと多かり。師のもとに来て二月斗に成ぬ。やうやう秋にも成行まゝに、折からいと物哀也。げにうつせみの夢の世よ。昨日までは、たちねの二柱ゆるぎもなく、五人のはらからならびたちて、人の

浦やみを招きし物が、今日はいしずへと頼み置し（以下書かれず）

## ⑤ 朝がほ

秋風少しみにしむほどに吹て、もの心ほそき折しもあれ（以下書かれず）

## ⑥ 大方ものはおかしきもこれ（以下書かれず）

⑦ 今は親の家にもあらねば、秋風すこしみにしむ頃まで、其色をすら見もやらねば、意なつかしくて、哀一鉢にてもゑまほしうなど思ひ居たりしに（以下書かれず）

## ⑧ 朝がほ

大方花のゝどかなるも、月の哀なるも、おのが心の雲も風もなくてこそあれと、やうやうに思ひ成ぬ。おのれとしごろ秋草の花に心を寄せてあるが中に、朝がほの一朝の栄とか、忌まわしくはいふものから、たれも千とせの松ならぬ世に、何事をか忌まんものはと、家にも作り、園にも植えなどしけるに、ことし谷中之辺に住人より、師のもとへ、うるはしきかぎり二本三本送りこしぬ。いとうれしくて、みそのゝにやととへば、其入谷といへること聞てひとしく、何とも覚えずふと胸ふたがりぬ。あゝ其入谷、四とせの昔、上野之片ほとり西黒門町といへるに住たる頃よ、父も兄も此の世の人たり。家富みたりといふにあらねど、住たる家も我もの也。父は非職閑散の身ながら、兄は法律

治め、一年にて卒業といふなる、（はらから五人生れたるまゝに家も定まり——この部分は削除されており、以下書かれず）<sup>(5)</sup>

以上の①から⑧まで、私意に番号を付して引用した断片を、前後との関係に注意しながら、一葉が何をどのように書きたかったのか考えてみたい。これらは「しのふくさ」の六丁表から一三丁表までに連続して書かれているが、その中で和歌・俳句、住所・人名の手すきびなど、文章の断片以外のものは省略した。これらの全体を見渡してみると、内容の上で大きく二つのグループに分けられる。最初一葉は、「はつ秋風」という題の下に、自分が父の死を契機として中島歌子の家に寄宿することになったことを、哀調深く書こうとしている。次に、「朝がほ」という題で、自分が以前から朝顔が好きだったこと、および到来物の朝顔に触発されて、家族に囲まれて過ごした西黒門町時代への懐旧の念を書いている。

しかし、よく読んでみると①から⑧までは、一葉の心の中で、当初はつきりとした形を持たず漂っていた想念が、ある一つの流れに沿って少しずつ明確な表現を獲得し、それによって、より深い内容へと発展してゆくさまがよくわかる。<sup>(6)</sup>⑧は未完の断片ではあるが、この時点では①から⑦までの到達点を示している。したがって、①から④までと、⑤から⑧までは、一見別の内容のように見えるが、「はつ秋風」から「朝がほ」へ

の発展的成長過程と捉えることができる。そのことは③から⑦までに、すべて共通して「(秋) 風身にしむ」という表現が現れていることからわかる。つまり、一葉は、「秋の舎」に内弟子に入って数ヶ月経った頃、さまざまの経験から「秋の舎」における自分の位置付けを認識するようになるとともに、自然と来し方行く末に思い巡らすようになった。その時、季節は初秋に移りつつあり、「秋風身にしむ」といういかにも古典文学的な修辭も、決して単なる常套句ではなく、実感として意識されたのであろう。

ところで、言うまでもないことだが、その実感や現実の体験がそのまま与えた文学に結実するわけではない。一葉の場合においても、何によって第三者が読みうる文学作品へと変容させることが可能となったのかということこそ、研究されなくてはならない。①から⑧までの断片はどれも短い書きかけの草稿ではあるが、後の一葉文学の芽生えがすでに表れており、一葉の表現や発想を考える手がかりとなるので、順次詳しく見てゆくことにしたい。

①と②では、まず兄の死とそれに続く父の死により、家族や家庭が崩壊し、自分が一種の「みなしご」となって他人の家に入ることになってしまったという、最も大きな目に見える変化を書いている。しかし、これらの断片はあまりにも事実のみの記述であって、そこにはそれ以上文章を続けてゆくだけの内的

展開力というものが欠けている。そこで一葉は、次に①と②を、「秋の悲しさ」と「秋風が身にしむ」という古典的常套句によってふくらみを持たせた。さらに、『源氏物語』の著名な一節、「須磨にはいとど心づくしの秋風に」を連想させるような「心づくしよ」という文末によって、一葉は無意識のうちに自分の現在の境遇を貴種流離譚の主人公のように位置付けていることが読み取れる。しかも③では、「はつ秋風」という題も付けており、ある程度まとまったものを書こうとしていることを感じさせる。

④も「はつ秋風」の題の下に、冒頭部分はほとんど③を踏襲するが、③では単に「さまざまみだる」となっていた表現を、「はぎのした露みだる」と変えている。その後③から発展させて、まず『百人一首』で有名な二条院讃岐の恋歌、「わが袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らねかわくまもなし」を、自分の境遇への嘆きの表現へと転じて使っている。そして世の中のはかなさを「うつせみの夢の世」と書いているが、「うつせみ」という表現は後に未完小説「かれ尾花」や『たま櫛』の冒頭に再び使われている。それに続けて新たに書き加えられた部分が重要である。「昨日までは、たらちねの二柱ゆるぎもなく、五人のはらからならびたちて、人の浦やみを招きし物が」という展開は、③までに見られなかったもので、ここに両親と五人の兄弟がすべて揃った完全な形としての一葉の一家

の姿が描かれ、現在の欠落感がいやがうえにも強調されている。ところが、ここにすでに文学的誇張や虚構がある。「昨日まで」ということがそもそも誇張であるし、何よりも「五人のはらからならびたち」ということが、虚構である。確かに一葉は五人兄弟だったが、一番上の姉ふじは、一葉が二歳の時結婚し、四歳の時離婚し、七歳の時再婚している。また次兄の虎之助は、一葉が十歳の時から陶工成瀬誠志に徒弟奉公しており、長兄泉太郎は、一葉が十五歳の時神戸大阪で貿易を始めるべく家を出たが、失敗し帰京した。このように五人兄弟ではあったが、内弟子時代を除いて一葉がずっと一緒に暮らしたのは、妹のくにだけである。ただし、一葉が四歳の時、本郷六丁目に住んでいた一時期は、姉のふじも家に戻っており、文字通り「たちねの二柱ゆるぎもなく、五人のはらからならびた」っていた。けれどもこれはほんの一時期であり、④に書いている状況とは異なるのである。ある意味では一葉は、事実とは相違していても、敢えてこのように書くことによって、言葉による充足した「家庭」の再現を行っている。しかしながら、現実にはこのような「家庭」はすでに失われてしまっており、いかにしてこの失われた宝とも言うべき「家庭」を取り戻すことができるのか、そしてそもそも「家庭」とは真に求めるべきものであるのかという根本的な疑問への検証が徐々に一葉の内部で形を取ってくるのである。つまり、家庭の再生への模索の一方

で、恋愛や結婚を拒否し、孤独のまま生涯を送ろうとする主人公群の誕生など、後の一葉文学の萌芽は、この「萩の舎」内弟子時代に自覚され、書き留められていった断片の中から生まれていったと言っても過言ではない。

さて、⑤になると題が「朝がほ」となっており、④までと少し違った視点や方向を指し、⑦までのごく短い断片において、一葉は、朝顔の花に託して新たな展開を試みる。ただし、表現上は秋風にまず言及することなどから、それ以前の断片の延長線上にあり、その到達点が、先にも述べたように⑧である。

⑧は、書き出しの一文からして今までに見られぬ思索の跡が明示される。外界の美しさを感じとれるのも、自分の心に心配や不安がなくてこそであるということが、花月風雲といったいかにも古典的な表現を使いながら簡潔に提示されており、このようにまず文頭に自分自身がつかみとったこの世の真実を書くという書き方は徒然草の章段を思わせる。そして、一葉が以前から朝顔を好んだこと、「槿花一日の栄」とは言えど、誰も永遠の生命を保てるわけではない、だからそのようなことは気にせず、庭に植えていたことが書かれる。そして谷中に住んでいる人から師の中島歌子に朝顔の鉢植が届けられたことから、一葉は、上野西黒門町時代への回想へ入ってゆく。⑧の粗筋を辿ればこのようになるが、ここでは、⑦までに書かれていたこと

がすべて融合されて、十分に文学作品としての鑑賞に耐えるすぐれた表現と展開を示している。

この⑧では、ある日、入谷の朝顔が到来したというなにげない日常の一コマを起点として、それまで断片的に浮遊していたさまざまな思いが、一気に凝縮して、まとまった一連の作品へと成長していった過程が、よく表れている。徒然草的な冒頭の一文。それに続くかつての自分の朝顔への愛着。そして届けられた見事な朝顔の鉢植。その朝顔が「入谷といへること聞てひとしく、何とも覚えずふと胸ふたがりぬ」というきわめて自然な一瞬の心の変化。「入谷」という言葉が発せられるやいなや、突然一葉の心に当時の幸福な家庭生活の記憶が甦ってくる。このあたりの書き方は、一葉が誰に教えられたわけでもなく、「意識の流れ」の技法を体得しているようにさえ思わせる。ところで、ここでも一葉は多少の虚構を交えて書いている。西黒門町に住んでいたのを「四とせの昔」としているが、実際は六年前からである。なぜ四年前としてのか疑問である。ただし一葉がこの西黒門町の家から「萩の舎」に通い始めた年から数えるところと四年前になるので、そのようなことから「四とせの昔」と書いたのかもしれない。その後の「はらから五人生れたるまゝに家も定まり」という文章を削除しているのは、先に④のところで触れたように、五人の兄弟が揃って暮らしていたのは、明治九年に本郷六丁目に住んでいた時だけであるので、

そのことを考慮したためであろう。

⑧では、朝顔の持つはかない美しさが人生のはかなさと結び付けて考えられてきた文学伝統と、それにこだわらぬ日常生活での愛着という、一葉の内部で並存しつつも相対峙していた二つのことがらが、兄や父の死を体験することによって一つにまとめ上げられている。この入谷の朝顔という素材を得て初めて、それまでの内弟子生活のつらさや、その対極にあった追憶されるかつての完全な家族構成に基づく家庭のありさま、さらに人生のはかなさなどが、緊密な表現となって姿を現したのである。その表現を生み出し、文章を展開させてゆく推進力となったのが、冒頭部に見られる古典文学の知識教養であったと考えられる。古典的な文学知識と現実の痛切な体験が相俟って、文学作品と呼びうるすぐれた表現と内容の両者を兼ね備えたものが書けるのである。

一葉の文学を考える場合、ともすれば、一葉の現実の体験が重視されがちであり、もちろんそれらが文学誕生の重要な契機とはなっているが、それだけでなく、特に古典文学との関わりもきわめて大きな役割を果たしていることを再確認しながら考察を進めてゆきたいと思う。



## 四 初期未完作品にみる恋愛観と徒然草

一葉の最初の作品は、雑誌『武蔵野』に発表した『闇校』であるが、これ以前にもいくつかの小説断片を残している。ここでは、二つの小説断片「かれ尾花」と「柵なし小舟（甲種）」を取り上げ、一葉の小説技法の特徴および徒然草との関連を考えてみたい。

この二つの断片は、どちらも明治二四年秋、中島歌子に提出して添削を受けるために書かれたもので、「柵なし小舟（甲種）」には歌子の朱筆が入っている。一葉は、この年の四月から桃水に弟子入りして小説を書くことを試みていた。しかし、六月一七日の日記には、試作が桃水によってかなりはつきりと批評され、帰路、小説執筆に絶望したことをうかがわせる記述が、婉曲な表現ながら書かれている。<sup>(1)</sup> そのようなこともあって二三月桃水を訪問しないうちに、今度は桃水に関する不愉快な噂も一葉の耳に入り、一〇月末までは、上野の図書館に通ったりしながら独力で小説執筆の勉強を続けた。そのような中から生み出され、歌子に指導を仰いだのがこれらの未完小説である。

「かれ尾花」は、両親に死別した若い女性が主人公で、彼女に献身的に仕える娘は、何とかしてこの女主人に幸福な結婚を

してもらいたがっているが、本人には全く結婚の意思がなく、両親が残した邸宅にずっと住み続けることを願っている、というのがその粗筋である。冒頭の書き出しは、秋のものの哀れな情景を、雁・東籬の菊・時雨・霜・砧などといった伝統的な秋の歌題によって描き、次いで父は高潔な裁判官だったことが中国の故事を踏まえて書かれ、荒廃した邸宅の描写へと移ってゆく。このあたりから『源氏物語』の表現や場面設定が大いに使われ、特に「蓬生」が中心となつて筆が進められている。さらに、徒然草との関連も見られるので、そのあたりの表現を次に引用してみよう。

さはいへど、いつかは世に成出らるべき身かは。親しかるべき人にだも返りみられ難き幸なさにて、誰かは蓬生の奥まで尋ねん物ぞ。もしはいさゝか幸ひありて思ひの外の世にあふとも、御覽ぜさす人もあらずかし。多くもあらぬ親族などにくまれなん、それもうし。只此むぐら生こそ無き御かげのとゞまり給ふとおもへば、いとなつかしきに、こゝを捨て立離れなんは玉の臺も更に更にのぞましからずよ。うつせみの世の事はしも、あてなるも賤しきも富めるもまづしきも終にはことなる事あらじを、外にもとむるなんいと浅き事ぞとよ。我身はかくなん思ふ、とて少し打笑めば、あなぬゝしや。法師がいふらん悟りとかいふことやめ給へ。さるはかく草深くのみおはしますに、いとゞ

世の中遠く成てさるひが事も、の給ふなれ。きらきらしき都大路のさま、行かふ人の衣の色のうるはしきをみるにも、哀、我君にもかゝる粧ひさせ奉らばや、何斗の人の娘ならん妻ならん、などあらぬ人をもうらやみ侍る。

こは、主人公の「はかなく落はふれたる娘」と「めのとの娘つや」との会話の場面である。女主人を「世にかひあるさま」にしたいと言うつやの発言を受けて、この作品でとうとう最後まで名前も与えられずに終わってしまう女主人公は、誰もこのような「蓬生の奥」まで尋ねては来ないだろうし、この親の形見の屋敷から出て行くつもりはないと、自らの堅い決心を語る。このあたりの状況設定も表現も『源氏物語』の「蓬生」そのままと言ってよい。二番目の傍線部は、「蓬生」の「かく恐ろしげに荒れはてぬれど、親の御影となりたる心地する古き住みかと思ふに、慰みてこそあれ」の部分に直接依っている。なお、誰も尋ねては来ないだろう、と女主人公に言わせてはいるが、この場面の前にもこの女性のありさまを「秋萩のはなの下えだぬれたらん心地して」と喩え、「すぎたる人の垣間見んに折らではえこそとまどはれぬめり」と書いているところから、未完のこの作品の展開としては、垣間見による男性の登場と、何らかの関係の発生という筋が考えられていたと推測される。このような筋立ては、後の『たま櫛』の中に生かされている。

さて、三番目に傍線を付した部分には、世の中ははかなく、身分や財力にかかわらず誰も皆最後は死が訪れるのだから、外界に何かを求め期待するのは浅はかなことだ、という女主人公の世の中に対する無常観ともいうべき感慨が表されている。このあたりの考え方は、徒然草の冒頭部に顕著に表れているいわゆる「詠嘆的無常観」とほぼ等しい。そのことを踏まえて、読者に先回りするかのように、ただちにつやに「法師がいふらん悟りとかいふことやめ給へ」と言わせているのである。おそらくここで徒然草的なものを出したことの自然な連想に依ると思われるのが、五番目の傍線部である。この表現は、徒然草第一三七段の葵祭り見物の記述で、「をかしくも、きらきらしくも、さまざまに行き交ふ、見るもつれづれならず。」と、「大路見たるこそ、祭り見たるにてはあれ。」の箇所を使っているのだろう。

以上のように、「かれ尾花」では、和歌・中国の故事・『源氏物語』が巧みに使われており、執筆に際して自然に十分こなれて摂取できるほど一葉の古典文学に対する教養が高かったことがわかる。その中で特に注目すべき古典としては、やはり徒然草ではないだろうか。なぜなら、他の作品は場面描写や季節描写に主として使われているのに対して、徒然草の場合は、主人公の人生観・価値観といった、より心理の深層と関わる部分に使われているからである。「かれ尾花」は結局中断したまま未

完に終わってしまったが、厭世感に満ちた主人公の人物設定は、来たるべき恋愛関係の発生とその展開を、より複雑で陰翳に富むものとすることが予想される。もちろん、没落した若い女性の暗鬱な人生観には、兄や父を失い精神的にも経済的にも非常に苦しい状態にあった当時の一葉の現実の姿が反映しているだろうが、その一葉自身の体験や感慨を作品に投入するにあたって、徒然草が果たしている役割は、他の文学作品と比べて一段と大きなものが認められると思う。厭世感や無常観は、先にも述べたが、若くして死んだ兄泉太郎のことや、父の死にもなう世間のつらさなどによって一葉の心の中に刻印された。そして、一葉が作品を執筆する時点で徒然草に書かれているそのような内容と表現の両方が、自然と作品の中に織り込まれていったのではないかと考えられる。初期の一葉の作品には、この厭世感と恋愛感情が表裏一体となっているものが多い。恋愛に没入することのできない主人公たちは、心の根底に無常観や厭世感を持つている。その無常観・厭世感が桎梏となって恋愛が悲劇的様相をとらざるを得ない。このことは、作品世界のみならず、一葉が桃水との交際を意識する場合にもそのままあてはまる。そして、一葉は、桃水への思いを自分の心の中で昇華しようとするが、その際にも再び徒然草の思想が一葉の精神的支柱となつて登場するのである。

次に、もう一つの未完小説断片「棚なし小舟（甲種）」を見

てみよう。この作品は「かれ尾花」の約半分ほどの長さ、四〇〇字詰め原稿用紙に換算して三枚余りの短いものであり、ごく最初の部分しか書かれていない。この作品の主人公は「其原何某」という独身の青年である。この青年も「かれ尾花」の女主人公同様厭世的で、世間との交際を自ら避けてひっそりと孤独な生活を送っている。「あしがきのま近き頃とか、行水の流れ清き江戸川のほとりに」という書き出しは、『方丈記』の冒頭を彷彿させるし、「両親の死後世話になっていた伯母が死ぬと従兄弟たちとの仲がうまくゆかなくなり、家を出て独り暮らしをするようになった」という設定も、『方丈記』に描かれている鴨長明の人生の軌跡と似ている。こうして「棚なし小舟（甲種）」は、まず『方丈記』の表現と長明を思わせるような経歴を用いて執筆が開始されるが、それにすぐ続いて書かれる主人公の人物描写や季節描写・住居描写は、徒然草と密接な関連が見られる。

いときなきより学びの道に志ふかゝりしかば、螢をあつめ雪に照しゝまどの光りは身にそはりて、才の際もなまなまならず、人ざまもいとめやすかりき。心ばせなんあやしう世にことなりて、かたくなしきまでまめなる人にて、柳を結び花を折などのざれたる方露まじらねば、友などはさうさうしがりて、玉の盃何とかやしたるものにいひなして、琴酒詩のまとはには、大方なげうたれし成べし。かゝ

ればやうやう世の中せばう成て、心うきこといと多かり。

公に仕へまつりても、軽らかならんは人わろく口をしく覚ゆるに、わたくしにこゝろざすこと、はたさはり勝にて、

こゝもかしこも心ゆかぬことのみ重なれば、棚なし小舟波にたゞよふ様にて、浮たる世をすぐすほどに、ともすれば

岩ほの中もとめまほしき折々もあれど、さすがに大み世の光りこひしくて、えそむきあえず、いたづらに月日明し暮

しぬ。春の花はたれこめたるまにとくうつろひはてゝ、霞も隔てぬ月のかげをいと涼しとみるまに、蚊遣の烟空に消

て吹かへす風に秋は来にけん、衣のうら淋しくも成ぬ。広からぬ庭のおもながら、遣水の流れ清きもあり、もの深か

らねど木立も故なからず、さゝやかなる垣のもとに萩きちかうをみなへしなどののはつかに咲出たるもをかしきに、も

のより手をさし出したる様にとかいひけん初尾花の、穂の先あかくて打まねきたるまつ虫のほのかに鳴出たるもいと

哀也。<sup>9)</sup>

ここで傍線を付した表現が、特に徒然草や近世の兼好像と関わる箇所である。まず最初の傍線部は、江戸時代に書かれた兼好伝説と酷似している。たとえば、篠田厚敬によつて著された『種生伝』において、兼好の人となりは次のように造型されている。

いとけなきより才かしこく親につかうまつるこゝろざし

あつく、人をいくつしむ心ふかし。風雅の道は、彼香山の跡をしたひ、和歌の浦波に心をよせ、庭の雪に目をさらし窓の螢に書をてらす。弓馬の道は、其家に生れたれば、ことはりながら世にもすぐれしとなり。すがたもいときよらにてもものゝあはれをもしる人よといへば、内にても、院の御所にても、すぎずきしき女ばらは、色めきほのめかし、聞えけれど、さやうのあだごとをばさらにこのまず、あけくれたゞうちしめりたるやうにてさうごうしくみさほにのみものしけり。<sup>10)</sup>

この傍線を付した『種生伝』の表現と、一葉の表現は非常に似ている。どちらも幼少期から賢く、学問を志し、恋愛への無関心さが強調されている。一葉が『種生伝』を直接読んで、執筆の参考にしたとまでは断言できないが、理想的な主人公としての造型という点で『種生伝』における兼好像と、「棚なし小舟（甲種）」の其原青年の人物像が一致したのだろう。つまり、この時点での一葉の理想の男性観と、近世の兼好の理想像が共通する類型に含まれていることが、一葉の文学と徒然草との親近性を感じさせるのである。

「玉の盃何とかや」の部分は明らかに、徒然草第三段の、「万にいみじくとも、色好まざらん男は、いとさうごうしく、玉の卮の当なき心地ぞすべき。」に依る。また、「岩ほの中もとめまほしき」の部分は、直接は『古今和歌集』の「いかならむ巖の

なかに住まばかは世の憂きことの聞こえこざらむ」(雑下・九五二・読人知らず)の和歌に依っているのだろうが、徒然草第一三七段末尾との関連も考えられる。

さらに、ここに描かれているように、脱俗の強い願いにもかかわらず、出家しきれないという人物設定や、その人物にふさわしい住まいの描写などにあたっては、出家者の生活を描く『方丈記』よりも、徒然草のほうがより適合するところから、徒然草第五段・一〇段・四三段などが影響を与えている。「かれ尾花」では、主人公が没落した若い女性であるところから、その住まいの描写も『源氏物語』『蓬生』が典拠となっていたが、ここでは隠遁志向の青年を主人公とすることによって、住まいも徒然草的なものとなっている。一葉は、作品に応じて出典を使い分けているのである。

「棚なし小舟(甲種)」では、先に引用した以外にも、「十三日斗の月、庭松の梢をはなれて、今さしのぼる光りけざやかに、晴行雲の行え遠くみえて、星の光りのまれなる夜也。千里の外までくまなげなるかげをみるにも、いとゞおもふことぞ限りなき。」のあたりは、それ以前の秋の庭の情景描写も含めて、徒然草第四四段の「心のまゝに茂れる秋の野らは、置き余る露に埋もれて、虫の音がごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは雲の往来も速き心地して、月の晴れ曇る事定め難し。」や、第一三七段の「望月の隈なきを千里の外まで眺めた

るよりも」などといった表現の影響が見られる。

桃水の指導が一時中断していた時期に執筆された二編の未完小説には、一葉の古典文学の教養が生かされ、その中でもとりわけ徒然草の影響が大きかった。男女を問わず厭世的で孤独を愛する人間を主人公とする小説を執筆する過程で、一葉は自らの人生観・恋愛観を一層明瞭にしたことであろう。桃水の指導が再開されたのは、その直後であった。

## 五 「闇桜」の基盤

一葉の文学形成における古典との関わりという観点から、ここでは一葉の和歌について考えてみたい。一葉の初期作品は恋愛短編小説であるので、一葉の恋愛観の基盤のひとつとなっていると思われるものとして、「恋百首」を取り上げてみよう。

「恋百首」は、筑摩書房『樋口一葉全集』第四卷(上)に収められている。補注によれば、明治二十一年五月に恋の百首歌による競点が行われた。参加者は、一葉、田中みの子、伊東延子、伊東夏子の四名で、点者は中島歌子と推測されている。その時に提出した詠草の控が残っており、その表書に「二十一年四月／戀百首／樋口夏子」とある。一葉は、四月にこれらの百首を作り競点に備えた。以上がこの「恋百首」の概略である。なお、この百首はすべて題詠で、原則として一題一首であった

ようだが、「耻身絶恋」「占恋」「障川恋」の三題のみはそれぞれ二首ずつ詠まれているので、題数は九七題となっている。また、歌は欠いているが「不叶心恋」という題も書かれている。

すべて題詠であり、競点という場での和歌ではあるが、これらの百首には、後の一葉の著作と密接に関連するものも多い。特に一葉の初期の作品は比較的全体の骨格が単純な恋愛小説がほとんどであり、ここですでに詠まれている恋歌の何首かが、作品の主要テーマとなっているように思われるものさえ見受けられる。つまり、一葉が最初に書いた作品群が恋愛小説だったということは、決して半井桃水との出会いと、それに引き続く桃水自身への一葉の恋愛感情に基づくものではなく、一葉が「萩の舎」において学んできた古典文学や和歌文学の世界に負うところが大きいのではないか、ということである。さらに言えば、一葉の桃水への態度や感情も全く白紙の状態から生まれているわけではなく、一葉がすでに文学の世界で体験し、また自分自身このような恋歌に詠み上げていく恋愛感情の機微に、現実の桃水と自分との人間関係をあてはめたり、なぞらえたりしている部分が大きいのではないだろうか。このような観点から「恋百首」の歌を見てゆくと、特に最初の作品『闇桜』の中にこれらの恋歌との関連が見いだされる。

『闇桜』は、隣同士の幼馴染みの青年と少女が、それまで兄妹のように分け隔てなく仲良く往来していたにもかかわらず、

ある時、縁日で少女の友人たちからかわれたのをきっかけとして、少女が青年への恋心を急に意識し、それ以後恋しいとなり、とうとう死んでしまうという、はかない物語である。上・

中・下の三章からなり、『武蔵野』第一編（明治二五年三月二三日発行）に掲載された。一葉の日記によれば、明治二五年一月一二日から執筆を開始し、途中で桃水の指導を受けながら二月一四日に完成させた。一葉自身テーマを片恋とすることは早くから決めており、明治二四年一月二四日の日記に、「骨子は片恋といふことにて侍りとて其筋だてなどかたる」と書いている通りである。しかしながら、このような漠然とした骨子・筋立が、『闇桜』という短編小説の完成形態をとるまでに成長・展開するためには、より具体的な表現・構想のよすがとなるものがなくては、その完成は困難であろう。そこで注目されるのが「恋百首」に詠まれている和歌である。『闇桜』執筆を遡ること四年、わずか一六歳の一葉が、おそらくほとんど頭のなかで作った恋歌ではあるが、このような恋歌をすでに詠んでいることが、その後の一葉の小説執筆に際して無関係なはずはあるまい。

従来『闇桜』との関連が特に指摘されている「恋百首」中の和歌は、次の二首である。

#### 恋心

ふみまよふ恋のこゝろを人とはゞたゞうば玉のやみ路なり

けり

(九)

## 片恋

かく斗思ふとだにも人しらはしなんいのちのかひは有けり

(五一)

九番歌は、『闇桜』という題名自体と関わる点で重要な和歌であり、五一番歌は、作品の結末と重なる。しかし、この歌以外にも、たとえば次のような和歌は、『闇桜』の作品世界と密接な関係があるように思われる。

## 思やする恋

朝な朝なむかふかゞみのかげにだにはづかしきまでやつれぬるかな

(三)

この歌は、『闇桜』の(下)で、主人公の少女中村千代が、恋患いで痩せ衰えてゆく次のような場面の描写と、相通じるものがある。

あはれや、一日ばかりの程に痩せも痩せたり。片醫あいらしかりし頬の肉いたく落ちて、白きおもてはいと透き通る程に、散りかかる幾筋の黒髪、緑は元の緑ながら油けもなきいたいたしさよ。<sup>(1)</sup>

もちろん、『闇桜』の表現の方が、格段に詳しい描写になっており、三番歌そのままではないが、恋によつて目に見えて衰えてゆく姿、という発想の原点になっているもののひとつが、このようなすでに一葉が詠んでいた和歌であったのではないか

と推測されるのである。また、若い主人公の死という結末は、先にも触れたような、長兄泉太郎の肺結核による死という体験が影を落としてもいるだろう。

また、『闇桜』の(中)で、隣の青年園田良之助のことを意識して、今までのような遠慮のない親しい態度をとれなくなった千代の気持ちは、次の二首の和歌をそのまま散文化したものとと言えるほど類似している。

## 一所恋

玉すだれまちかきほどに住みながらおもふこゝろをいふよしもなし

(二〇)

## 近隣恋

あし垣のまぢかきかひもなかりけりへだてゝのみも物をおもへば

(二五)

さらに、『闇桜』の作品世界の設定そのものと関わる発想として、『伊勢物語』二三段「筒井筒」があることは指摘されてきたが、一葉も「恋百首」のなかで、次のような歌を詠んでいる。

## 幼年契恋

いはけなきふり分がみに契りつる其ことの葉はかへじとぞおもふ

(四五)

以上のほかにも、『闇桜』の(中)で、千代が良之助のことを夢に見るシーンは、次の歌との類似を感じさせる。

## 夜中思出恋

逢とみし夢は跡なくさめはてゝ更に人こそ恋しかりけれ

(九二)

このように、筒井筒の恋、隣同士の恋、片恋、恋しい、夢の中でのほかない逢瀬などといった『闇桜』の主要モチーフは、すべてこの「恋百首」の段階で詠まれているものである。つまり、一葉は『闇桜』制作にあたって、それまでに得ていた古典的な類型的とも言える和歌の知的教養を、十分に活用しているのである。逆に言うと、それらを活用したからこそ一編の作品として完成させることができたのだろう。『闇桜』以前にも一葉は未完の小説断片をいくつか残しているが、たとえば、「かれ尾花」の場合は、『源氏物語』を活用しきれず未完となったとも捉えることができる。『闇桜』は、それらの体験を踏まえて体得した技法の最初の成果と言えよう。

『闇桜』が、一葉にとって最初の完成作品であることに着目するならば、『闇桜』の意義を考えるにあたって見落としてはならないのは、そこにどのような一葉の個人的な感情が込められているかではなく、いかにしてこの短編小説を誕生させることができたか、ということではないだろうか。その際に、「恋百首」のような恋歌をかつて詠んでいたことが、大きな役割を果たしているであろう。このような伝統的な和歌文学や古典文学に親炙していたことが、一葉が作品を生み出す時に原動力

となっていたのである。<sup>(12)</sup> しかしながら、一葉がいつまでも先行作品を自己の小説の素材としていたならば、新たな一葉独自の文学を作り上げることはできなかったろう。出発点では古典的な知識教養を十二分に活用したとしても、そこからの脱却がぜひとも必要になってくる。その時点で、桃水の実作指導が新たな一葉の脱皮を促したことは想像に難くない。『闇桜』にも桃水の指導は反映していようが、一葉の日記などに書き留められている桃水の発言を直接取り込み、その影響が色濃く見られるようになるのは、第二作『たま櫛』からであるように思われる。

## 六 『たま櫛』と桃水

『たま櫛』は、『武蔵野』第二編(明治二五年四月一七日発行)に発表された短編小説で、(上の一)(上の一)(中の一)(中の一)(下)の五章からなる。両親に死別し、谷中の邸宅に家族もなく住んでいる一九歳の旧旗本の娘青柳糸子が、家臣の松野雪三と偶然糸子を垣間見た竹村緑という青年子爵の二人の板挟みになって、自ら命を絶つという物語である。この小説の場合は『闇桜』と異なり、和歌文学よりも『源氏物語』の果たしている役割が大きい。先にも少し触れたように、未完作品「かれ尾花」は、『源氏物語』の「蓬生」のイメージを使いなが



ら、作品として完成するところまで到達できなかったが、この『たま櫛』では、「帚木」の「中川の宿り」が巧みに使われている。ただし、登場人物のネーミングは非常に和歌的であるし、「恋百首」の次の一首は、従来から『たま櫛』という題名との密接な関係が指摘されている。

#### 両方恋

なぞてかくひとつ心を玉だすき二方にしも思ひかけけん

(七)

けれども、この歌以外には関係歌は見いだせないようである。したがって、『たま櫛』においては、和歌の果たしている役割は大幅に後退していると言えよう。なお、題名に関して、『大和物語』の平定文の歌、「いつはりを糺の森の木綿だすきかけて誓へよわれを思はば」が挙げられることがあるが、この歌自体も、またこの歌が詠まれている物語の状況も『たま櫛』の内容と無関係であるので、『たま櫛』執筆にあたって一葉は、『大和物語』のことを念頭に置いていたとは思えない。

さて一葉は、明治二五年三月七日に桃水から、『武蔵野』第二号に掲載する作品の執筆依頼を受けた。当時一葉には腹案が二つあり、その一つは後に『うもれ木』となり、一つがこの『たま櫛』となった。ここで少し考えてみたいのは、一葉の心の中でどのような経路を辿って『たま櫛』が作品として結実したのか、ということである。この時点で一葉はすでに第一作

『闇桜』を完成させているわけであるから、『闇桜』と『たま櫛』の間には何らかのつながりが伏流しているのではないだろうか。

『闇桜』は、一言でまとめれば、「恋の病いがもとで桜とともにはかなく散つてゆく少女の命」がテーマであった。これら、悲恋・少女・桜・死というキーワードからただちに連想されるのは、『万葉集』巻一六の巻頭の「桜児伝説」ではないだろうか。

昔娘子あり、字を桜児といふ。ここに二の壮士あり、共にこの娘を誂ひて、生を捐てて、格競ひ、死を貪りて相敵る。ここに娘子歔歔きて曰はく、「古より今までに、未だ聞かず未だ見ず、一の女の身の二の門に往適くといふことを。方今壮士の意、和平し難きことあり。如かじ、妾が死にて相害すこと永く息まむには」といふ。すなはち林の中に尋ね入り、樹に懸りて経き死ぬ。その両の壮士、哀慟に敢へず、血の涙襟に漣る。各心緒を陳べて作る歌二首

春さらばかざしにせむと我が思ひし桜の花は散り行けるかも  
(三七八六)

妹が名にかけたる桜花咲かば常にや恋ひむいや年のはに  
(三七八七)

『闇桜』の完成を承けて、一葉の心の中では自然とこの「桜

児伝説」のことが思い浮かんだのではないだろうか。二人の男性から同時に愛され、どちらとも決めかねた女性が、自らの命を絶つという話のパターンのヒントを得て、『たま櫛』執筆が開始した。しかしこれだけで一編の小説がたちまち出来上がるわけではない。その際に、『源氏物語』の「帚木」が糸子と緑の出会いの状況設定に採用され、零落したみなし子で厭世的な結婚拒否型の主人公糸子の人物設定には、未完作品の「かれ尾花」がここで再び使用されることになった。

このように、『たま櫛』では、いわゆる三角関係による女性の悲劇という結末自体はおそらく『闇桜』の結末から導きだされた「桜児伝説」にヒントを得るとともに、『源氏物語』の強い影響の下に創作されたと推測されるが、家臣松野雪三の糸子への献身的な愛情という設定のヒントはどこから得たのだろうか。そのことを考える上で参考になると思われるのは、明治二四年一月二四日の日記に書かれている桃水の恋愛観である。

あやしうもの語りの口とけて、いでやこの恋斗あやしきものはなし。貴きも賤しきも賢なるも愚なるも其わいだめなき物也けり。されども今のよにては、其道をもて人をたぶらかし、世をくりますなにと多き。城をかたむくは女のみにてはあらざりけりなどの給ふ。奸譎なる美少年の貞淑なる良婦をたぶらかす談、利根の紳士が良家の処女が操をもて遊ぶ談などあり。さていはく、かゝる類ひはみな

其人を愛すにはさぶらはず、害すにて候也。誠の愛といわんからには、其女が一生の大計を思ひはかりて安全なる良人を求め得せんことをこそ思ふべけれ。さて其人を撰らばんに世人が愛は猶我がおもふ意に満たず、世人が敬は猶我が敬に過ぎず。世広しといへども人多しといへどもかの女を敬愛することは我に過るの物はあらじ、さらばかれが安全の極り幸福の生涯をすぐさんこと我ならで誰かは、な

ど思ひ到りたるこそ誠の愛なれ、などの給ふ。<sup>14)</sup>

ここに書き留められた桃水の発言は、桃水が一葉に語った言葉そのものという保証はなく、一葉がある程度自分の言葉で書いているかもしれないが、傍線を付したあたりは、特に興味深い。最初の傍線部は、徒然草第九段の、「まことに、愛著の道、その根強く、源遠し。六塵の樂欲多しといへども、みな厭離しつべし。その中にたゞかの惑ひのひとつ止めがたきのみぞ、老いたるも若きも、智あるも愚かなるも、変るところなしと見ゆる。」という捉え方と似ている。もちろん、これがそのまま徒然草の恋愛観の影響というわけではないだろうが、両者に共通するものがあることは確かだろう。

また、後半部に傍線を付した桃水の恋愛観は、自分が相手と結ばれることよりも、愛する相手の幸福を第一とし、その上で自分以上にその人を幸福にできる人間は世間にはいないとはっきり断言できるほど、相手のことを思うのが真の愛である、とす

る。この恋愛観はそのまま『たま櫛』の松野雪三の青柳糸子に対する感情である。

妻もたずやと進む人あれど、何の我がこと措き給へ、夫よりは嬢さまの上気づかはし。二十歳といふも今の間なるを、盛りすぎて花も甲斐なし、適當の聲君おむかへ申し度ものと、一意専心主おもふ外なにも無し。主人大事の心に比らべて世上の人の浮薄浮佻、才あるは多し能あるも少なからず、容姿学芸にすぐれたればとて、大事の御一生托すに足るひと見渡したる世上に有りや無しや知れたものならず、幸福の生涯を送り給ふ道そも何とせば宜からんかと、案じにくれては寐ずに明す夜半もあり、嫁入時の娘もちし母親の心なんのものは、疵あらせじとの心配大方にはあらざりけり。<sup>15)</sup>

(上の二)

『たま櫛』だけを読むと、松野雪三の人物造型はいかにも作り物めいてリアリティに欠けるように感じられるが、日記の先の箇所と読み合わせてみると、一葉は桃水の恋愛観をほぼそのまま使っていることがわかる。十一月二十四日のこの部分の直前には、一葉が最初の小説を書くにあたって、「骨子は片恋といふことにて侍りとて其筋だてなどかたる」と書かれているので、『闇桜』執筆との関連でこの日の日記は捉えられてきたが、今引用した部分は、次作『たま櫛』制作において生かされたのであった。

『たま櫛』は、青年が知人の家で避暑を過ごすことによって、偶然隣の糸子と出会うという状況設定に『源氏物語』が使われている点に、一葉の古典の教養が表れているが、登場人物の心理描写という、より作品の内部に関わる点では、たとえ直接的な指導ではなくふとした雑談の折の桃水の言葉だったとしても、桃水の影響が顕著に出ており、第一作とはまた違った一面が見られるのである。

## 七 おわりに

一葉は、約一年間桃水の指導を受けながら、『闇桜』『たま櫛』のほかにも、四月には『改進新聞』に一五回にわたって『別れ霜』を掲載し、五月初めには『五月雨』を完成させた(『武蔵野』第三編・明治二五年七月二三日発行)。これらの二作にも徒然草の引用や影響が見られるので、最後に簡単に記しておきたい。

『別れ霜』の第二回の書き出しは次のように始まるが、傍線部には徒然草第二一七段が引用されている。

隴を得て蜀を望むは夫れ人情の常なるかも、百に至れば千をと願ひ千にいたれば又万をと諸願休む時なければ心常に安からず、つらつら思へば無一物ほど気楽なるはあらざるべし、(中略) 鶴千年亀万年人間常住いつも月夜に米の

飯ならんを願ひ飯にも無常を觀するなかれとは大福長者と成るべき人の肝心肝要かなめ石の堅く取つて動かすべからざる法則なりとか、(以下略)<sup>(16)</sup>

この第二二七段は、日記『若葉かげ』の跋文にも、「究竟は理即到し等し」という部分が引用されており、一葉にとつて特に馴染み深い章段であつた。ただし、今まで一葉が古典文学を引用するのは、主として、作品の格調を高くするための引用であつたと言えると思うが、ここでは、新聞連載小説ということによるのか、「肝心肝要かなめ石の堅く」などといった頭韻を踏んだかなりくだけた表現を取つていることが注目される。

『五月雨』の場合は、明確な徒然草の引用は見られないが、主従二人の女性から同時に愛された青年が出家する結末は、近松門左衛門の浄瑠璃『つれづれ草』の粗筋と一致している。浄瑠璃『つれづれ草』では、兼好が、やはり主従二人の女性から慕われ、その執念から逃れるために出家することになつてゐる。<sup>(17)</sup> 先述した「棚なし小舟(甲種)」でも主人公の造型が江戸時代の兼好伝と一致していた。ここもおそらく偶然の一致であろうが、一葉の発想と近世の兼好像の共通性を暗示しており、興味深い。

さて、本稿では、一葉が半井桃水と出会つて、小説家として実質的に第一歩を踏み出すまでの約一年を概観した。この一年は大きく三期に分けられる。第一期の明治二四年四月から六月

までのことは日記『若葉かげ』に描かれ、第二期の七月から一〇月末までの桃水訪問中断期は、「かれ尾花」「棚なし小舟(甲種)」という二つの未完小説を生んだ。そして十一月から翌年春までの指導が再開する最後の第三期には、一葉は四編の小説を発表した。従来、これらの初期短編恋愛小説は、桃水への一葉の恋愛感情との関わりで論じられることが多かった。しかし、個人的な感情だけで読者の鑑賞に耐える作品を生み出すことは不可能ではないだろうか。そのような視点から、作品を自立させるものとして、古典文学が果たした役割に特に着目してみた。桃水との出会い以前の「萩の舎」内弟子時代の雑記を、古典文学との関わりに注意しながら取り上げたのも、作家一葉の誕生前史としての連続性を重視したからにほかならない。一葉の古典文学への造詣は深く、詳細に見てゆけばゆくほど、どの作品や断片や日記にも和歌・王朝文学・中国古典などが、縦横に駆使されていることがわかるが、その中でもとりわけ徒然草への共感が強く、作品に現れた恋愛観への反映も多い。そしてそのことは、この「最初の一年」の後に訪れる心ならざる桃水との別れと懊悩において、より直接的に徒然草が一葉の自己変革のための書物として再認識されてくるという意味で、さらに重要な問題をはらんでくるのであるが、このことについては別稿に譲りたい。

## 注

- (1) 樋口一葉の雑記・日記・作品等はすべて、筑摩書房『樋口一葉全集』によった。ただし、私意に句読点を付し、表記を改めた箇所もある。
- (2) 一葉の文学と徒然草の関連について、初期から晩年までを概観した論文として、菅根順之氏「一葉と徒然草」(『言語と文芸』昭34・9)がある。
- (3) 全集第三巻(下)
- (4) 放送大学研究年報第9号(平成4年3月30日発行)
- (5) 全集第三巻(下)
- (6) 明治二年初春の雑記にも、本雑記に先行する同様の執筆態度が見られる。そのことについては、注4拙稿参照。
- (7) 明治二四年四月から六月までのことを記したが、日記『若葉かげ』である。
- (8) 全集第二巻
- (9) 全集第二巻
- (10) 拙著『徒然草の変貌』(ベリかん社・平4)第三章参照。
- (11) 全集第一巻
- (12) 『閨校』における古典や自詠との関連については、橋本威氏も『樋口一葉作品研究』(和泉書院・一九九〇)の中で触れておられる。
- (13) 小学館『全集樋口一葉』小説編一の解説。
- (14) 全集第三巻(上)
- (15) 全集第一巻
- (16) 全集第一巻
- (17) 注10書第三章「近世文芸にみる兼好像」参照。

(平成四年九月二十九日受理)

Ichiyo's View of Love and *Tsurezuregusa*

—as seen in her early works—

Yuko SHIMAUCHI

## ABSTRACT

In this paper considers the view of love that appears in Higuchi Ichiyo's early works in light of the connection with *Tsurezuregusa* and other classics.

The pieces by Ichio discussed come primarily from the 23rd and 24th years of Meiji (1890-1891), and include unfinished fiction and miscellaneous writings, as well as two short love stories, "Yamizakura" (Flowers at Dusk) and "Tamadasuki".

Ichiyo became aware of the ephemerality of life both with the death of her older brother and father, and from the sense of having fallen in the world that accompanied her financial distress.

Where these experiences are reflected in her works there are frequent quotes from *Tsurezuregusa*, and the attitude toward love is pessimistic.